

# 風土



癩の火<sup>や</sup>葬場<sup>きば</sup>の黒煙突が櫻抽く

(句集『竹取』より昭和三十八年作)

この句は、前書「長島愛生園を訪ふ 十六句」のひとつです。長島愛生園はハンセン病(癩病)の療養所でした。年譜によると草間時彦・小林康治と共に慰問とあります。三人とも「鶴」に関わる俳人ですので、俳句を愛好する患者への慰問かと思ひます。そこで療養所の中の火葬場を目の当たりにしたのです。華やかな櫻を抽んで、黒々と聳える煙突に桂郎師はなにを感じたのでしょうか。

夕市や地べたの華の海老栄螺

(句集『竹取』より昭和四十年作)

これも「能登四十一句」の前書きがあり、年譜には七泊八日で能登平島を旅したとあります。以前の佐渡行もそうですが桂郎師は積極的に、俳句に風土性を求めています。境涯性からの脱却を意識してのことです。

莫座に直に置かれた採れたての能登の「海老栄螺」を、「地べたの華」と褒めたたえています。

## 鯉揚げのどん底の冷網しぼる

(句集『能ヶ谷』より昭和五十八年作)

前書きに「横手郊外大沼」とあります。「鯉揚げ」は「池普請の時に池の水を抜き、養殖した鯉を揚げることを言います。「池普請」で池底にたまった雑物を除き、池底の泥を掘り上げ池をきれいにするのです。揚げた鯉は内陸地の農家にとって冬の貴重なタンパク源になります。器師は池底の冷え冷えとした水にひしめく寒鯉の引き揚げを、「どん底の冷網しぼる」と表現し読み手に臨場感を伝えています。

## 水よりも雲の濡れある初桜

『能ヶ谷』より昭和五十八年作)

「初桜」は春になって初めて咲いた桜の花のことです。この「初」には「初音」や「初蝶」などと同様に待ちこがれる美意識が含まれています。桂郎師はやっと咲いてくれた喜びを「水よりも雲の濡れある」と表現しました。これは桂郎師独特の修辞で、「初桜」そのものの瑞瑞しさを伝えるためです。これでその頃のしっとりとした空気分や漂うように宙にひらく「初桜」が見えてきます。

深く踏む

南うみを

甲斐・境川 五句

山廬いま櫟大樹の青嵐

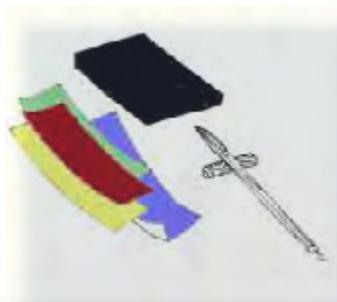
涼風に龍太の筆の立つばかり

深く踏む龍太が留守の竹落葉

袋掛普羅の白根を真向ひに

ほうとうを堪能したる汗あをし

紙干場 高きに朽ちて夕河鹿  
分蘖のすすむ早さやほととぎす  
新じやがを掘るや梢を揺する猿  
あぢさゐに猪噴きし泥うちかかり  
みづうみを圧さんばかりや梅雨の雲  
しろがねの道ゆく月のなめくぢり  
何にでも「はい」と云ふ母萋の花



# 竹間集

同人作品



やませの夜

土井 三乙

海見えて短き畝や葱坊主  
薄暑かな載とふ字辞書に見て  
ほうたるへ宿下駄揃へられてあり  
シャツの釦外し水飲む日の盛  
黙つて見る風なき午後の鉄風鈴  
雄鶏の胸張つて立つやませ風  
明日飲む葉確かめやませの夜

竹は皮を脱ぐ

林 いづみ

薫風の萩垣そなふ能舞台  
ほろほろとほろと南天花こぼす  
梅雨に入る姿見大き試着室  
三通の診断書あり桜桃忌  
主留守の山廬や竹は皮を脱ぐ  
泰山木咲くや宝珠を解き放ち  
枇杷熟れて砂のつぶやく渚ゆく

茅の輪

小林 共代

男梅雨信長公記十六巻  
山頭火分けし夏野と思ひけり  
夏燕本丸跡の水溜り  
家ぬちに刃物の曇る五月雨  
茅の輪巻く白布に神宿りをり  
薫風や神御座します格天井  
まつすぐに汐の香とほす茅の輪かな

田 植

中根 美保

朴の花ペンをかざして指しくれし  
古竹を時折くべて夏炉焚く  
海坂や裾消えかかる皐月富士  
石塀につづく鉄柵薔薇匂ふ  
流螢に遅れて樹々の戦ぎかな  
ひとところ泥のつめたき田植かな  
南風吹く砂の中なるガラス片

入梅宣言

間島 あきら

「入梅宣言」後の晴天続きかな  
水底の影に力やあめんぼう  
舟屋敷の口にはためく花櫓  
奈落より仰ぐ天窓みどり差す  
メタセコイアは森のあるじや蟄蛙  
黙に威を宿す 5 1 朴の花  
枇杷の実や波音に寂ぶ誓子句碑

竹落葉

宮川 みね子

日曜の朝のはじまり薔薇を剪る  
帰る家ありて忙げりねむの花  
ふるさとに目覚めてさみし昼寝かな  
ひとり居の音なく積もる竹落葉  
鉄線花仏に留守をたのみけり  
紫陽花を剪りし雫の膝に落つ  
青柿の落ちる音きく仔犬抱き

岩清水

浜 福恵

福田周草さんの百寿を祝ぎて  
百年のいのち芳し岩清水  
カレーが匂ふ家の燕の子だくさん  
引揚の海や芒種の月稚し  
それぞれの位置定まりし浮葉かな  
昼蛙そこにゐたのか巻葉揺れ  
睡蓮の白を尽くして観世音

# 山河集

同人作品



南うみを選

田水張り一番星を誘ひけり  
吉水すみれ

あるがまま暮らす余生や月涼し  
尺通りの尺とり終へて立ち上がる  
花火師の使ひきつたる夜空かな  
剥落の仁王のつかむ若葉風

窓若葉生後二日の指しやぶり  
森田節子

指揮者よりピオラ奏者へ薔薇一輪  
太宰忌の杭に絡みし水草かな  
Tシャツに山頭火の句涼しかり  
エンピツの太さ初生り胡瓜かな

黒髪のさらりと夏日はじきけり  
岡 尚

六月のふくれきつたる雑木山  
万緑の鎌倉五山建長寺

街薄暑糊のききたるシャツ眩し  
夕焼の海せり上がり胡瓜もむ

太き手が茄子の濃紺挽ぎくれし  
池田光子

夫作るトマト歪に熟れてをり  
丹精のトマト熟すを撫でて待つ  
梅雨明の煮汁に躍る落し蓋  
青嵐子が一点となり母を呼ぶ

万緑へ神鶏の声遥かなり  
中嶋陽子

涼風の充つ境川小学校  
文字淡き龍太の句碑や雲の峰  
富士を見る朝の散歩の涼しさよ  
ほととぎす船頭小屋の葉缶焦げ

# 風土独語／南 うみを



花火師の使ひきつたる夜空かな

吉永すみれ

この句は「花火師」に焦点を当てることにより、花火の揚がる様、群衆のどよめき、終わったあとの夜空の様子など、いろいろな想像させてくれます。特に「使ひきつたる」に花火師の自負と満足感が伝わり佳句になりました。

花合歓に影も重さもなかりけり

石井 秀一

虚子に「箒木に影といふものありにけり」とそこはかさを詠んだ句があります。作者は大胆にも「影も重さもなかりけり」と断定し「花合歓」に迫りました。

太宰忌の杭に絡みし水草かな

森田 節子

「太宰忌」と「川」は素材として定番ですが、それをずらして「杭に絡みし水草」と置きました。「絡みし」が水死の太宰やその心性を想い起こさせます。

多佳子忌や山背の強き里に住み

上辻 蒼人

「多佳子忌」は五月二十九日です。「七曜」を主宰し奈良を拠点としました。「山背」は恐らく吉野山を越えて来る風のことです。作者はその強さに多佳子の気丈な生涯を重ねたのです。

黒髪のさらりと夏日はじきけり

岡 尚

「夏日」は気温二十五℃以上をいい、厳しい日差しを前提にしています。この「黒髪」の人物はそれを「さらりとほじき」ました。健康的なはつらつとした若い女性を想像します。

母衣蚊帳の赤子の出べそ皆ほめて

山田 健太

「母衣蚊帳」は幼児用の小さな蚊帳です。眠りについた赤子を近親が覗いて、一様に「りっぱな出臍だね。大物になるよ」と誉めるのです。顔でないとそこにおかしみがあります。

青嵐子が一点となり母を呼ぶ

池田 光子

万緑をゆるがして吹き渡る風の中では、子供はまるで小さな点です。自然のエネルギーに吞まれそうに感じ、子は必至に母を呼びます。自然への畏れがそうさせるのです

青ぐるみ蛇笏龍太の下駄の音

奥田 茶々

この句は境川吟行の「山廬」での作。その後ろの庭には「青ぐるみ」がたわなに実り、思わず「蛇笏龍太」の着流し姿を想い浮かべたのです。二人の下駄の音が聞こえてきます。

万緑へ神鶏の声遥かなり

中嶋 陽子

「万緑」から広大な杜の木立を想像します。その一角から「神鶏」の高らかな声が響いてきました。この「遥かなり」には単に空間だけでなく神世の時間も含まれています。(以下略)

# 風土集



## 南うみを選

心なしか背の縮みをり更衣 神奈川

石井秀一

日盛りを水族館の水の中

花合歓に影も重さもなかりけり

囀あり有ますとあり道の駅

厨より妻の呼ぶ声夕端居

草刈るや草の匂ひを昂らせ 五條

上辻蒼人

多佳子忌や山背の強き里に住み

愁ひ持つやうにむらさき花菖蒲

六月の峰濃淡の覇を競ふ

路を採る小さきものは野に残し

ただいて来しはメロンと蠅叩 水戸

山田健太

大いなる棕櫚の隙間や蠅叩

駐在は冷やし中華を提げて来し

定食に妻白玉を追加して

母衣蚊帳の赤子の出べそ皆ほめて

安曇野の植田を跨ぐ大糸線 東京 奥田茶々

山の端の夕日に暈や蝸牛

約束に遅れし山廬松涼し

青ぐるみ蛇笏龍太の下駄の音

一族の墓へ夕焼匂ひ来る

青鷺の水かげろふの上に佇つ さいたま 竹生田勝次

泰山木朝日をあつむ一花かな

片蔭の大きな銀座通りかな

白南風や恙なかりし胃検診

夏雲を追ひて目葉さしにけり

地下足袋に眼あり筍掘り当てし 川崎 遠藤遥子

舌頭に一句をのせて端居かな

傘寿まで刺繍の教師鉄線花

仰臥して一句を得たり籐寝椅子

鐘の音の蛩袋に籠りたる